



ICT だより

2016年10月31日

第98号

宮城県北感染対策セミナー 2016 ～各感染症に対する感染対策の実際～



県北感染対策セミナー

みやぎ県北 感染対策セミナーが下記の内容で開催されます(参加費無料)。参加を希望される方は感染管理室までご連絡ください。

日時: 11月5日(土)

13:15～16:20

場所: 芙蓉閣

基調講演

「各感染症に対する最近の感染対策はどうなっている？」

- ウイルス性胃腸炎の感染対策
- インフルエンザの感染対策
- 結核の感染対策

特別講演

「再確認しよう！臨床現場における器材処理」

風疹とその感染対策

はじめに

風疹はトガウイルス科ルビウイルス属の風疹ウイルスによって引き起こされる感染症です。感染経路は飛沫、接触感染で空気感染では伝播しません。潜伏期は2～3週間、ウイルスを排泄する期間は発疹出現前の1週間から出現後1週間といわれ、比較的長期に渡って感染性を維持します。風疹ウイルスに対する免疫がない集団の中で、ひとりの感染者が何人に感染させるかを示す基本再生産数(R_0 :アールノート)は5～7で、麻疹の12～18よりは低いものの、季節性インフルエンザの1～2よりは高いと報告されています。

発熱、全身の発疹、頸部のリンパ節腫脹が3主徴ですが、すべてが揃わない症例も多く、不顕性感染は15～30%程度存在します。特に成人で発症した場合は、高熱や発疹が長く続いたり、関節痛を認めたりする(女性に多い)など、小児より重症化することがあります。また、極めてまれですが脳炎や血小板減少性紫斑病等の合併症も併発します。風疹に特異的な治療法はないためワクチンによる予防が重要です。

先天性風疹症候群(Congenital Rubella Syndrome: CRS)は、妊娠20週頃の妊婦が風疹ウイルスに感染し、胎児に多様な奇形を生じる先天異常症をいいます。妊娠初期の感染でCRS児になりやすく、児の主な症状は、白内障、先天性心疾患、難聴、脾腫、小頭症などです。2012～2014年に日本では45例のCRS児が確認され、そのうち追跡調査できた22例中、7例が生後6ヶ月までに死亡したと報告されています。

風疹ワクチン接種の変遷と感染しやすい世代

風疹の予防にはワクチンが有効で、世界的に使用されています。日本では1977年8月～1995年3月までは中学生の女子のみが風疹の定期接種(無料接種)の対象でしたが、その後、紆余曲折があり、2006年度からは1歳と小学校入学前1年間の幼児(6歳になる年度)の2回接種となっています。風疹ワクチンの定期接種が開始さ

院内感染対策研修会

インフルエンザの院内感染研修会を下記の日程で開催します。インフルエンザを発症した場合の対応と感染対策についての講演ですので、医療職だけではなく、事務職の方の参加もお願いいたします。どうしても当日の参加が難しい職員のために、DVDによる上映会や各部署へのDVD回覧も後日おこなう予定です。

なお、この研修会には委託企業職員の方も参加が可能です。事前申し込みは必要ありませんので、可能な限りご参加ください。

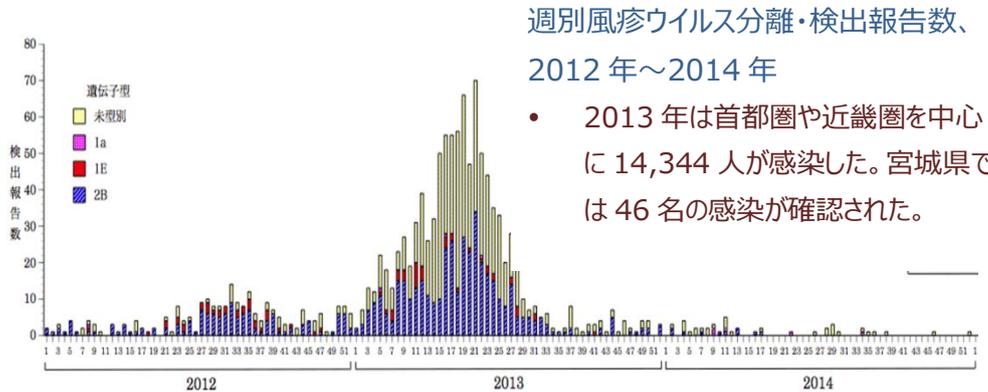
日時：11月4日(金)
15:00～16:00

場所：3階会議室

演題：

インフルエンザ発生時の対応と感染対策

れる以前の世代は、風疹に自然罹患し免疫を獲得していますが、定期接種導入時の対象が女子のみであったことや、学校などでの集団接種でないこともあり、ワクチン接種率が低い世代が存在します。女性では1982年～1995年、男性では1960年～1995年に生まれた人が風疹に罹患しやすく、特に昭和1972年～1980年生まれ男性は、2013年に起きた大規模な流行(下図)の際に、一番高い感染率となった世代で、今後も注意が必要です。



風疹の今後と感染対策

日本は2020年度までに風疹の排除達成を目標に掲げています。そのためには国内の充実したサーベイランス体制の維持や、高いワクチン接種率を継続することが必要です。しかし、もっとも感染リスクがある壮年期の男性へのワクチン接種は進んでいません。また、CRSの予防には妊娠前の女性へのワクチン接種が有効なのはもちろんですが、父親が免疫を獲得していると、母親への感染リスクが軽減されるため、当該男性への積極的なワクチン接種が望まれます。2013年の流行では、2011年に近隣の国々で発生した流行が国内にも波及したといわれています。海外では、まだ十分に風疹対策がとられていない国々があり、日本でもハイリスク者への対応が不完全のままでは、数年後には再び大規模な流行が起きるのではないかと懸念されています。

もしも、医療施設内で風疹の発生があつたりすると、感染対策、二次三次患者発生などの対応で、大変な手間と時間、費用が必要となります。特に、産科外来や病棟で発生した場合の影響は甚大で、病院の経営にも大きな打撃を与える可能性があります。このような事例を起こさないためには、平時からのワクチン接種に努めるのが最良の策です。当院では風疹抗体価が低い職員を対象とした病院負担によるワクチン接種を継続実施しています。該当者には定期的に接種案内を通知していますので、通知がきた際には積極的にワクチン接種を受けることを強くお勧めします。

編集：大崎市民病院感染管理室(2916)